

氏名（本籍）	小 松 俊 介（福島県）
学 位 の 種 類	博士（芸術学）
学 位 記 番 号	博甲第 7006 号
学位授与年月	平成 2 6 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	石彫における量塊と重心に関する研究 —黒御影石による制作実践を通して—

主	査	筑波大学 教授	博士（芸術学） 守屋正彦
副	査	筑波大学 教授	博士（芸術学） 中村義孝
副	査	筑波大学 教授	柴田良貴
副	査	田園調布学園大学 准教授	博士（芸術学） 中原篤徳

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、石彫における黒御影石特有の表現について考察し、制作を通してその一つの可能性を作品として提示しながら、成果と課題を明らかにすることを目的とする。

（対象と方法）

本研究では、著者自身の制作研究を軸として石彫表現の可能性を探究している。まず、黒御影石の加工方法について明らかにし、著者自身のこれまでの制作研究の成果と課題について省察している。その上で、量塊と重心に着目して論考し、これを通して得られた知見を踏まえて、作品《Jangala》[h. 125×w. 150×d. 90(cm)、黒御影石] を制作し、実証的な研究成果として、量塊と重心に関する石彫表現の具体化を図る。

（結果）

著者の目指すところは、果実が実るような張りを有する量塊を実現することを念頭に、身体的な張りは、若さと子孫繁栄への願いとも結びついているものと考え、これらを“生”そのものの姿と認め、国や言語を超えて人々に共感を得るための可能性として見出した。理想的な量塊を体現する上で、黒御影石を用いた表現において、鑿と鎚を用いて石に対して求心的に叩くことで得られる形の積み重ねが重要であるとし、また、量塊については、いわゆるバランスを保った視覚的に“立つ”状態を実現するため、造形的側面から重心を意識表現を追求し、作品《Jangala》を考察の成果として制作した。本作は量塊性のみを追求していたこれまでの作品に比べて、地面を強く踏み込んで重心を保つ作品の在り方を表現し、力強さと立つことによる緊張感を創出した。観者にとって量塊と重心を意図した作品と交感するための糸口となり得る表現への到達が

図られた。上記の結論を踏まえて、黒御影石特有の量塊性と重心の位置に着目した著者の石彫表現は、古代の聖遺物や遺跡の要素を素地としつつ、それを内在させた表現であると位置づけている。

(考察)

本研究では以下のような章立てにより考察を展開している。

第1章では、黒御影石について地学的な知見から言及した上で、石の加工方法について明らかにしている。特に、鑿を用いた仕上げ方法である「むしり仕上げ」の造形的特質について知見を深めている。第2章では、著者が制作した作品7点を取り上げて造形の変遷について省察している。著者の制作の特徴として、一方的にイメージを石に彫り起こすのではなく、石の形からきっかけを見出だして制作を展開している点が挙げられる。十全な量塊性の獲得を目指して制作しているが、これについては一定の成果が得られたと捉えている。その一方で作品の抽象的な形態は、観者にとって難解なものとして受け取られるようになったと省察している。第3章では、表現の深化を目的として量塊と重心という観点から考察を試みている。第1節では、素材と形の関係性について言及している。また、著者の制作方法について、プリコラージュの概念を用いて論じている。第2節では、量塊の性質について身体感覚を機軸に考察している。第3節では、重心について造形との関係性から論考している。特に三点で立つ構造に着目し、古代の造形物や彫刻作品の例を挙げながら論じている。その結果、十全な量塊を体現すると共に、重心の位置を造形的側面から捉え、作品に立つ構造を取り入れることで表現が一段階深化すると考察された。第4章では、作品《Jangala》について、制作過程に沿って論じている。最終的に過去に造られた著者による作品と照らしながら、研究の成果と課題について明らかにしている。

審査の結果の要旨

(批評)

これまでに石彫という分野では、幾つかの技法書が記されている。また、石工職人の間で長らく継承されてきた道具や技術など歴史的研鑽の深い分野といえる。しかしながら、これまでの石彫について、その表現との関係について、技法と合わせ、具体的に言及する研究は殆ど見られなかった。この点に鑑み、本研究では著者自身の制作研究を対象として、実践に根ざした現実的な視座から制作方法や制作観について検討しており、これまでの技法書とは異なり、具体的な研究成果を示した新規性に富む研究として評価できる。特に、黒御影石を用いた石彫表現において、量塊と重心という観点から著者による表現を探究し、作品として成果を示した点は特筆される。ただし、著者自身の制作者としての実力や技能については、未だ発展途上の過程にあるものと言わざるを得ないが、論文においては表現活動の根幹を担う制作観が示されており、今後の制作研究において補強され得るものと期待できる。石の種類や制作方法が多岐に渡る中で、黒御影石を用いた石彫表現の一つの可能性として具体的に論じた本研究の成果は、決して軽微なものではなく、今後本研究の成果は一つの指標としての役割を果たすものと高く評価できる。

平成26年1月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。